「宴」の裏側

利根川　裕

私の作品「宴」が、思いもかけず、テレビ、舞台、映画で競作されることになった。原作者というものは、自分の作品に対しては、すみからすみまで知悉していると思いがちだが、それは作者の不当な思いあがりかも知れない。親が自分の生んだ子のすべてを知りつくせないと同様、作者も作中人物を完全に知っているわけではない。その点、人の手にゆだねられた「宴」は、原作者の思いもかけなかった長所を発見してもらったり、逆に考えてもみなかった欠点を見せつけられたりで、それぞれの「宴」を、私はひとりの観客に立ち返って、よろこんだり悲しんだりしてみている。

「モデルはありますか」

とは、よくきかれることであるが、実際のモデルはなに一つない。もちろん背景の二・二六事件や、その他の社会的事件、当時の天候などは事実であるが、いわば、そういう客観的実在性を保証したうえで、人物は完全に架空なものとしてこしらえたわけである。

しかし、私は、この作品の主人公たちを設定するとき、私個人の三十数年の歳月と対い合うことを否めなかった。そして、筆をすすめるうちに、つぎつぎに、すでに葬り去った筈の人々が、蘇えり語りかけてきたのである。その意味で、主人公の館隆一郎の生い立ちには、作者と作者の周辺の人物の影が、色濃く出ているといえよう。

父の死が「宴」の重要なモチーフである。父純之介の夭折がなかったら、館隆一郎は存在しない。

私の父も私の五歳の時に死んだが、私の身に即して言えば、父はなにものでもない。現代心理学を適用して、私の諸傾向のなかに、オイディプス・コンプレックスを見つけ出そうとすれば出来るであろうが、顕在的、あるいは自覚的なものとしては、私は父からは何もうけついではおらぬし、うけついでおらぬことをとやかく言う気もまったくない。そういう意味で、父はまったく私にとって他人である。子どもの時以来、一度会ってみたいなどというセンチメンタルな感情をもったことはほとんどなかった。

私の父の名前は純。家つきの伜ではなく、祖父の兄の次男である。写真でみる父は、石川啄木を医者にしたような顔をしている。いかにも結核で三十歳前後で死ぬ人間にふさわしく、神経質で痩せている。事実、小柄な人であったらしい。啄木という

想像は、少々美化した言いかたで、実人物は貧相な小男であったようだ。

作品とは違って、私としては一度も見たことのない父親に対しては、なんの幻想も哲学も抱いていない。その点に関しては、私はまったく想像力を欠いた子どもである。

父には兄弟がたくさんあった。現存しているものも二、三あるが、特に深いつき合いはない。それに大勢の兄弟の半数以上は、いずれも結核で若死している。その中で父のすぐ下の弟が、ひところは飛ぶ鳥おとす勢いの、はやる医者であった。如才ない、よく出来た人物で、父をうしなった私を、たいへんに可愛がってくれた。私としても、この叔父にだけは、肉親的感情を素直にもっていたのである。

私の高等学校一年生のとき、この叔父に軍医としての召集が来た。彼が汽車に乗せられて中国大陸に行くとき、私は駅まで見送りに行った。私以外、見送り人は誰もいなかったように憶えている。汽車が出るとき、彼は私の名を叫んだ。だんだん小さくなって見えなくなるまで、彼は私の名を叫んで身を乗り出していた。

父というものがもしいて、その父だったら、こうしてあたりかまわず私の名を絶叫して戦地に行くものだろうなあ、と思ってしゅんとなったものである。

その叔父は、上海へ上陸するかしないうちに戦病死してしまった。叔父の訃報をきいたとき、私は父が死んだようにその死をうけとった。

父の死んだ翌年、当時まだ医学生だった叔父が夏休みで帰省し、六つの私を抱きしめてくれたのを記憶している。そして私を連れて写真屋へ行き、二人並んで写真をとった。その写真の裏には、彼の字で〝兄さんの一周忌に〟と記してある。私はいまでもその写真をもっている。他人でなかった、と私が信じているほとんど唯一の人である。

作中の祖父憲次郎。実在の私の祖父は政憲といった。この名は親がつけたものではない。親の命名は作次。作次をきらって、みずから政憲などという大げさな名を名乗ったところが彼である。いわゆる成功者であった。裏日本のちっぽけな町のはしに住みながら、読めない横文字のカタログをとりよせては、舶来の品を手に入れるのが好きだった。そういう祖父の心事を、今の私は、とても憎む気にはなれない。彼はまた立派な風貌の所有者でもあった。晩年に、勲章をもらったとき（それも最下級の勲八等）、よろこびにふるえるようにして、フロックコートを着、勲章を胸にして写真をとった。出来上った写真を、写真屋はお世辞のように、

「まったく蔣介石さんみたいです」

と言った。いまでこそ蔣介石はドンキホーテの別名だが、日支戦争直前の蔣介石は、国際的大立者で、まだ若くもあったし、その風格はルーズベルトやチェンバレンに劣らなかった。

祖父は、いまでいえば、渋谷天外に似たところがあり、このコメディアンをギリシャ悲劇風な荘重趣味で飾ったと思えば間違いない。子どものときから、私はこの祖父

を、その人物よりも、その風貌のゆえに愛していた。

宴会があるという日は、舶来のカミソリで丹念に髭をそり、さらにそのあと、祖母に髭を抜かせるほどおしゃれであった。出入りの床屋があやまって彼の美意識以上に口髭をみじかくすると、いきなりなぐりつけるほど怖かった。

祖母は千代といって、近くの高田藩の藩医の娘であった。祖父は彼女の家柄を愛しながらも、気位の高さには僻易していた。成功者は、もっと無邪気な讃美家を欲していたのである。

近所の人はみな、祖母を〝美人だ〟と評判し合ったが、私にはかならずしもそう思えなかった。肉づきのいい、色白の大柄な女性であった。子どもごころに、私は、美人というものは、もう少しこじんまりとした感じがなくてはいけないとひそかに思ったものである。

祖父の乱行が原因か、祖母のヒステリーは有名であった。裏の線路へ飛びこむといったり、前の海へ飛びこむといってきかなかったり、そのたびに出入りのものや近所の人が大さわぎをした。

戸籍面はともかく、実際の血筋からいうと、私はこの祖父と祖母の孫ではない。子のなかった夫婦は、男と女を他家から貰いうけた。私はその子どもである。祖父とは、まだしも血縁があるが、祖母とはまったく血縁がない。私を猫可愛がりに可愛がって、死ぬまで私に乳房をいじらせることはやめなかった祖母だが、大人になったいま、私に祖母に対する懐しさはさほどない。

「宴」には、死への美的傾斜が著しいが、たぶんそのきっかけは、父の死が、死体となってではなく、白布の箱としてあったからであろう。そして私が、実際に父の死を見たのも白布の箱である。

私自身は臆病な少年だったから、祖父や祖母の屍体を見せられたときは、気味が悪くてとても美的昂奮なぞもてるわけのものではなかった。

祖母は心臓麻痺で、つい一時間ほど前に私と入浴したあと、あっという間に畳の上で死んだのだが、彼女がうつ伏したまま死んだ畳の位置を、私は大人になってからも見るのが気味悪かったものである。祖母の死んだ部屋から南を見ると、大きな松の庭木があった。その向うの塀越しは一面の田圃で人家もない。祖母の死んだ時刻になると、その大きく黒い松の葉が騒ぐような気がして困った記憶がある。

ずっとあと、大学へ来てから、太宰治の『斜陽』で、母の死ぬ日、松の木の幹にいっせいに蛇がまきついて上るところを読んで以来、私は故郷の松の木が一層気味悪いものに思われた。大学を出て二、三年たちその故郷の家を売り払いに帰ったとき、祖母の死んだ畳の場所を見、松の木を見、蛇の姿を想像したとき、私が十年以上も育ったその家が、何か死者ののろいのこもった家のような気がし、売りはらう感傷はひとかけらもなかった。

そういえば、神経痛でうなりながら一人寝ていた祖父の部屋は、同時に仏間でもある四畳間であった。贅沢好きであり、そし

て沢山の部屋を作った祖父が、なぜそこを自分の寝室にしていたのか、それはわからない。

父の死、祖父母の死、その法事と、子どものときから、葬式や法事に立ち会うことの多かった私は、墓地にある種の親近感をもっていたことは否定できない。それが、「宴」の主要な舞台に青山墓地を選ばせたのかもしれない。また、一時期、勤めの関係で七、八年間、毎日、谷中墓地を通っていて、墓地の感触をよく知っていたからでもある。そのころの私は、いろんな点で失意の青年であったから、谷中墓地は、たんなる通り路以上に、あるときは勤めをサボって散策したり、午睡したりする場所でもあった。夏の日盛りに、冷やっこい墓石を枕に、蟬の音をきいて何時間もあらぬことを考えていたこともあった。

自分をとりまく周囲一切が、すべて死んだ人間であると考えると、へんに心が静まって安心するのが常であった。まったく見知らぬ人の墓石の傍で、その人の生きていた姿を想像してもみた。生きている人のことを考えるより、もっと生々しい想像がかき立てられる思いのしたことを憶えている。逆説のようにきこえるかもしれぬが、墓地で人間のことを考えると、ふだんよりも、何層倍も生への肉感的な感想をもつ。

夕ぐれや夜の墓地は、しばしば若い男女の密会の場所に供される。それは暗くて人通りが少ない、ということもあろう。がもっと進めて、墓地という舞台がもつ、生命へのエロシチズムとまで考えては言いすぎであろうか。朝の谷中墓地で、私は時おり、その愛のあとを見出したが、死者が眠っている場所での、生命の行事をどう考えていいか、戸惑ったことであった。

当時私は怠惰な若者であったが、他人の墓石を撫でながら〝金剛石も磨かずば…〟などとウソぶいて気をまぎらしていたのである。

昨秋、ある人の葬儀で青山斉場へ行った。ちょうど、「宴」単行本のための校正が終った日でもあった。タクシーの窓から青山墓地が見えたとき、どういうわけか、私は、はっとした。そしてひどく懐かしい気がした。主人公の館隆一郎も観世鈴子も、もうこの世には生きていないという、抜きさしならない感慨がこみあげて困ってしまった。女主人公の鈴子は、冬の寒い日にこの墓地で服毒自殺するわけだが、私は、鈴子の亡骸を見つけ出して、秋の陽のぬくもりのなかで、いつまでも抱きしめたい気持ちにとらわれていたのであった。

一年経った。私には、もはや主人公たちがこの世にいないことへの感傷はほとんどない。私は、この作品を他人にどう受け取られるかということよりも、まず私自身の記念碑にしたい欲求のほうが強かった。その意図からいえば、私は十二分にしたいだけのことをした、と言える。そして、はじめての作品が、このような形で世に出られたことの稀有な幸運も思わずにはいられない。

今はただ、館隆一郎と白坂鈴子の冥福を祈るのみである。